

Rec'd PCT/PTO 08 JUN 2005  
PCT/JP 03/15743  
**10/538035**

日本国特許庁  
JAPAN PATENT OFFICE

15.1.2004

別紙添付の書類に記載されている事項は下記の出願書類に記載されて  
いる事項と同一であることを証明する。

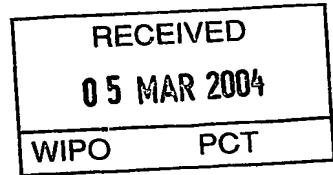
This is to certify that the annexed is a true copy of the following application as filed  
with this Office.

出願年月日  
Date of Application: 2002年12月18日

出願番号  
Application Number: 特願2002-366139

[ST. 10/C]: [JP 2002-366139]

出願人  
Applicant(s): 電気化学工業株式会社

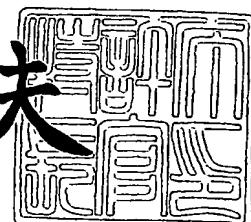


PRIORITY DOCUMENT  
SUBMITTED OR TRANSMITTED IN  
COMPLIANCE WITH  
RULE 17.1(a) OR (b)

2004年 2月19日

特許庁長官  
Commissioner,  
Japan Patent Office

今井康夫



BEST AVAILABLE COPY

出証番号 出証特2004-3010791

【書類名】 特許願  
【整理番号】 A101140  
【あて先】 特許庁長官 殿  
【国際特許分類】 C08L 25/14  
【発明者】  
【住所又は居所】 群馬県伊勢崎市長沼町西河原245番地 電気化学工業  
株式会社 加工技術研究所内  
【氏名】 武井 淳  
【発明者】  
【住所又は居所】 群馬県伊勢崎市長沼町西河原245番地 電気化学工業  
株式会社 加工技術研究所内  
【氏名】 徳永 久次  
【発明者】  
【住所又は居所】 群馬県伊勢崎市長沼町西河原245番地 電気化学工業  
株式会社 加工技術研究所内  
【氏名】 清水 美基雄  
【特許出願人】  
【識別番号】 000003296  
【氏名又は名称】 電気化学工業株式会社  
【代表者】 曽間 敏男  
【手数料の表示】  
【予納台帳番号】 028565  
【納付金額】 21,000円  
【提出物件の目録】  
【物件名】 明細書 1  
【物件名】 要約書 1  
【ブルーフの要否】 要

【書類名】明細書

【発明の名称】表面保護フィルム

【特許請求の範囲】

【請求項1】基材フィルム表面にフッ素系リン酸エステルのアンモニウム塩からなる界面活性剤の膜を有する表面保護フィルム。

【請求項2】基材フィルムの上に粘着剤の層を有し、粘着剤と反対の基材フィルムの表面にフッ素系リン酸エステルのアンモニウム塩からなる界面活性剤の膜を有する表面保護フィルム。

【請求項3】基材フィルムと粘着剤の層の間に中間層を有する請求項2に記載の表面保護フィルム。

【請求項4】粘着剤がアクリル系粘着剤である請求項2または請求項3に記載の表面保護フィルム。

【請求項5】粘着剤が、アクリル系粘着剤に可塑剤を添加したものである請求項4に記載の表面保護フィルム。

【請求項6】基材フィルムがポリエステルフィルムである、請求項1乃至請求項5のいずれか一項に記載の表面保護フィルム。

【請求項7】請求項1乃至請求項6のいずれか一項に記載の表面保護フィルムに剥離性フィルムが貼着されてなる表面保護フィルム。

【請求項8】剥離性フィルムがシリコーン離型コートされたポリエステルフィルムである請求項7に記載の表面保護フィルム。

【請求項9】剥離性フィルムの表面に帯電防止性物質を塗布した請求項7または請求項9に記載の表面保護フィルム。

【請求項10】偏光板とその表面に貼着された請求項1乃至請求項6のいずれか一項に記載の表面保護フィルム。

【請求項11】偏光板用の請求項1乃至請求項9のいずれか一項に記載の表面保護フィルム。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【発明の属する技術分野】

本発明は表面保護フィルムに関する。

### 【0002】

#### 【従来の技術】

表面保護フィルムは部材の表面に貼着され、部材の表面を保護する。

偏光板用の表面保護フィルムがある。液晶パネルの最表面に使用される偏光板は流通過程や液晶表示装置の組み立て工程における損傷を防止する為に、フィルムの表面に粘着加工の施された表面保護フィルムが貼着される。表面保護フィルムには偏光板の製造工程内で、偏光板背面に塗布された粘着剤や手垢、指紋その他の汚れが付着することがある。これらの汚れが容易に拭き取れる汚染防止性能が求められる。

汚れの付着を防ぎ、付着した汚れを容易に除去できるように表面保護フィルムの表面に汚染防止層を形成させる手段があり、例えば特許文献1から特許文献7に開示されている。

### 【0003】

【特許文献1】特開平6-256756号公報

【特許文献2】特公平6-29332号公報

【特許文献3】特開平9-113726号公報

【特許文献4】特開平11-256115号公報

【特許文献5】特開平12-321423号公報

【特許文献6】特開2001-96698号公報

【特許文献7】特開2001-6305346号公報

### 【0004】

偏光板の品質検査では表面保護フィルムの表面にインキ等により印をつけることがある。この場合、前記の汚れと異なり、インキは容易に表面保護フィルムにのり、多少擦るように拭き取っても脱落しないという、汚染防止性能とは相反する性能が要求される。

### 【0005】

#### 【発明が解決しようとする課題】

本発明は新規な表面保護フィルムを提供するものである。

**【0006】****【課題を解決するための手段】**

本発明は、基材フィルム表面にフッ素系リン酸エステルのアンモニウム塩からなる界面活性剤の膜を有する表面保護フィルムである。

**【0007】****【発明の実施の形態】**

(構成) 表面保護フィルムは粘着剤の層と基材フィルムを有する。粘着剤を基材フィルムに塗工してなる、基材フィルム／粘着剤の層という構成のものが好ましい。基材フィルムと粘着剤の層の間に中間層を有するものでもよい。

**【0008】**

(基材フィルム) 基材フィルムは熱可塑性樹脂を用いたものが好ましい。例えば、ポリエステル系樹脂、ポリスチレン系樹脂、ポリオレフィン系樹脂、ポリカーボネート系樹脂、アクリル系樹脂、ポリアミド系樹脂、ポリウレタン系樹脂、ポリ塩化ビニル系樹脂、エポキシ系樹脂、フェノール系樹脂およびこれらをアロイ化させたものを使用することができる。中でも、腰強度や該表面保護フィルムを剥離する際のフィルムの変形の有無等、取扱いの面を考慮しポリエ斯特ルフィルムを用いることが好ましい。基材フィルムは単層が好ましいが、複層であってもよい。その総厚は10～200μmとすることができる。

**【0009】**

(フッ素系リン酸エ斯特ルのアンモニウム塩からなる界面活性剤) フッ素系リン酸エ斯特ルのアンモニウム塩からなる界面活性剤とはフッ素系リン酸エ斯特ルのアンモニウム塩そのもの、あるいはフッ素系リン酸エ斯特ルのアンモニウム塩を主成分とし他に界面活性剤その他の添加物を含有するものである。フッ素系リン酸エ斯特ルのアンモニウム塩の割合は溶剤等の揮発分以外の成分中で50%以上であることが好ましく、更に好ましくは80%以上である。

フッ素系リン酸エ斯特ルのアンモニウム塩からなる界面活性剤は低分子量、低凝集性を有するものが好ましい。

低凝集性とは、フィルム上に塗布、乾燥された界面活性剤の膜にニチバン社の粘着テープ「セロテープ（登録商標）CT405A-24」をJISZ0237に

準拠する方法にて貼着し、300mm／分の速度にて180度剥離した後に、フィルムの塗布面と粘着テープ表面に界面活性剤成分が検出されることにより、界面活性剤とベースフィルムの接着力が界面活性剤層自体の凝集力よりも大きいことの指標として定めたものである。成分の同定には赤外分光光度法等の表面分析法が挙げられるが特にこれに限定されない。該評価において粘着テープへの移行が確認されるような界面活性剤を表面に塗布することにより、更に汚染防止性を有し、且つインキの表面密着性に優れたフィルムを得ることができる。

#### 【0010】

(フッ素系リン酸エステルのアンモニウム塩からなる界面活性剤の塗工方法) フッ素系リン酸エステルのアンモニウム塩からなる界面活性剤を基材フィルム表面に塗布するには、公知の塗工方法を用いることができる。グラビアコーティング、エーナイフコーティング、ファウンテンダイコーティング、リップコーティング等汎用の塗工設備によるロールコート法、フィルムを界面活性剤が霧状に噴霧された中に通過させることで表面に膜を形成させるミスト法、またスプレー法、バーコート法などを適用することができる。界面活性剤をフィルムに塗工し、溶剤等の揮発分がある場合はそれを乾燥し、除去して塗膜を得る。乾燥後の塗膜の厚みは1～500nmとすることが好ましい。塗膜の厚みがこの範囲内に収まるものであれば、同一若しくは2種以上の異なる界面活性剤を積層してフィルム上に塗布しても差し支えない。界面活性剤を塗布する面の濡れ特性を改質する目的で、基材フィルムの表面にコロナ放電処理、化学処理、紫外線照射処理を施しても良い。

#### 【0011】

(粘着剤) 粘着剤としては、例えばアクリル系、ウレタン系、ゴム系、シリコン系などを使用することができる。透明性の高いものが好ましく、粘着特性の容易さからアクリル系粘着剤が好ましい。粘着剤には、適度な粘着性を付与するために、粘着付与剤等が含有されていてもよい。粘着付与剤としては、例えばロジン系、テルペン系、クマロン系、フェノール系、スチレン系、石油系等がある。

#### 【0012】

アクリル系粘着剤は、アクリル酸アルキルエステルを主成分とし、これに極性単量体成分を共重合したアクリル系ポリマーを用いたものである。上記アクリル酸

アルキルエステルとはアクリル酸またはメタクリル酸のアルキルエステルであつて、特に限定されるものではないが、例えば、アクリル酸エチル、アクリル酸イソプロピル、アクリル酸n-ブチル、アクリル酸イソブチル、(メタ)アクリル酸ペンチル、(メタ)アクリル酸2-エチルヘキシル、(メタ)アクリル酸イソオクチル、(メタ)アクリル酸イソノニル、(メタ)アクリル酸デシル、(メタ)アクリル酸ラウリル等が挙げられる。

### 【0013】

アクリル系粘着剤は架橋剤と配合してアクリルポリマーを架橋し得る組成として用いられる。架橋剤としては、例えば、脂肪族系ジイソシアネート、芳香族系ジイソシアネート、芳香族系トリイソシアネートのようなポリイソシアネート化合物などが用いられる。更に、架橋反応が遅いものに対しては有機金属化合物等からなる架橋促進剤を添加することができる。

### 【0014】

#### (可塑剤)

粘着剤には可塑剤を添加することができる。可塑剤としては、例えばアジピン酸エステル系、グリコールエステル系、セバシン酸エステル系、トリメリット酸エステル系、ピロメリット酸エステル系、フタル酸エステル系、リン酸エステル系などがある。アクリル系粘着剤に対して使用する場合は、フタル酸エステル系が好ましいが、それに限定されるものではない。

可塑剤の配合量は、表面保護フィルムの用途、粘着剤の種類等により異なる。偏光板の表面保護に用いられる場合、 $R_a = 390 \text{ nm}$ の偏光板に対する $300 \text{ m m}/\text{min}$ の剥離速度における180度剥離強度が $0.01 \sim 0.3 \text{ N}/25 \text{ mm}$ 、 $5,000 \text{ mm}/\text{min}$ の剥離速度における180度剥離強度が $0.1 \sim 0.5 \text{ N}/25 \text{ mm}$ 、初期剥離強度が $1.0 \sim 2.5 \text{ N}/\phi 25 \text{ mm}$ であり、 $R_a = 390 \text{ nm}$ の偏光板に貼着した際の疊度が5%以下の範囲に入る量を配合するとよい。この範囲において、偏光板を用いたディスプレーにおいて、表面保護フィルムを貼着してもディスプレーの調整を容易にすることができ、表面保護フィルムが不要になったとき、容易に剥がすことができる。

アクリル系粘着剤に対しフタル酸エステル系の可塑剤を添加した場合は、アクリ

ル系粘着剤の固形分量100部に対し5~25部の範囲であることが好ましい。

#### 【0015】

##### (粘着剤の塗工方法)

粘着剤を塗布するには、公知のスクリーン法、グラビア法、メッシュ法、バー塗工法等を適応することができるが、これに限定されない。塗工された粘着剤の厚みについては特に限定されるものではないが、乾燥後の厚みで1~100μmとすることができます。

#### 【0016】

(剥離性フィルム) 表面保護フィルムの粘着剤の層に剥離性フィルムを貼着することができる。剥離性フィルムとしては、例えば表面をシリコーン系剥離剤やその他の剥離剤で処理したもの、それ自体が剥離性を有するフィルムなどを用いることができる。剥離性フィルムの厚みは10~100μm程度とすることが好ましい。剥離性フィルムを貼着した表面保護フィルムは巻き取って保管することができ、輸送するには便利である。剥離フィルムを有する表面保護フィルムは、剥離フィルムを剥がしてから粘着剤の層を偏光板等の保護するものの表面に貼着して使用される。剥離性フィルムの表面には帯電防止性物質を塗布することができる。

#### 【0017】

表面保護フィルムは各種部材の表面保護に好適に用いることができる。特に偏光板、液晶ディスプレー、プラズマディスプレー等の表面保護に好適に用いることができる。

#### 【0018】

##### 【実施例】

以下に本発明について実施例を挙げてさらに詳しく説明する。

##### (実施例1)

厚さが38μmの帯電防止性ポリエステル系フィルム(三菱化学ポリエステルフィルム社製、T100G)の帯電防止処理面にアクリル系粘着剤(総研化学社製、SKダイン1496)100重量部に対して硬化剤(総研化学社製、硬化剤D-90)0.8重量部、促進剤(総研化学社製、促進剤S)0.08重量部を混

合した粘着性溶液をバーコーターを用いて塗布し、100℃で1分間乾燥した。乾燥後の粘着層の厚みは約 $18\mu\text{m}$ であった。更に粘着層側に厚さが $25\mu\text{m}$ の剥離性フィルム（三菱化学ポリエステルフィルム社製、MRF-25）を貼合した。その後、基材フィルムの粘着剤を塗工した面とは反対面に、グラビアロールコーティングによりフッ素系リン酸エステルのアンモニウム塩からなる界面活性剤（ダイキン工業社製、ダイフリーME-313）を乾燥後の塗膜の厚みが $50\text{nm}$ となるように塗布し、100℃の温度にて数秒加熱し希釈溶剤を除去した。さらに、セクト社製のミスト機を使用して、表面保護フィルムの剥離フィルム面に、帯電防止剤SAT-4（日本製薬社製）を霧状に吹き付けたものを作製して用いた。

#### 【0019】

##### （実施例2）

基材フィルムの粘着剤を塗工した面とは反対面に、グラビアロールコーティングによりフッ素系リン酸エステルのアンモニウム塩からなる界面活性剤（ダイキン工業社製、ダイフリーME-414の2層分離溶液の下層）を塗膜の厚みが $50\text{nm}$ となるように塗布した以外実施例1と同様なフィルムを作成した。

#### 【0020】

##### （実施例3）

基材フィルムの粘着剤を塗工した面とは反対面に、ミスト法によりフッ素系リン酸エステルのアンモニウム塩からなる界面活性剤（ダイキン工業社製、ダイフリーME-313）を塗膜の厚みが $50\text{nm}$ となるように塗布した以外実施例1と同様なフィルムを作成した。

#### 【0021】

##### （実施例4）

基材フィルムの粘着剤を塗工した面とは反対面に、ミスト法によりフッ素系リン酸エステルのアンモニウム塩からなる界面活性剤（ダイキン工業社製、ダイフリーME-414の2層分離溶液の下層）を塗膜の厚みが $50\text{nm}$ となるように塗布した以外実施例1と同様なフィルムを作成した。

#### 【0022】

## (比較例1)

基材フィルムの粘着剤を塗工した面とは反対面に、市販の紫外線硬化型のシリコーン溶液をグラビアロールコーティングにより塗布し、紫外線を30秒間照射することで硬化膜を形成させた。得られた塗膜の厚みは50nmであった。これ以外実施例1と同様なフィルムを作成した。

## 【0023】

## (比較例2)

基材フィルムの粘着剤を塗工した面とは反対面に、市販の紫外線硬化型のシリコーン溶液をミスト法により塗布し、紫外線を30秒間照射することで硬化膜を形成させた。得られた塗膜の厚みは50nmであった。これ以外実施例1と同様なフィルムを作成した。

## 【0024】

## (比較例3)

基材フィルムの粘着剤を塗工した面とは反対面に、市販の長鎖アルキル基系離型処理剤をグラビアコーティングにより塗膜の厚みが50nmとなるように塗布した以外実施例1と同様なフィルムを作成した。

## 【0025】

## (比較例4)

基材フィルムの粘着剤を塗工した面とは反対面に、市販の長鎖アルキル基系離型処理剤をミスト法により塗膜の厚みが50nmとなるように塗布した以外実施例1と同様なフィルムを作成した。

## 【0026】

実施例、比較例における凝集性、汚染防止性、インキの密着性の評価方法は次の通りである。

## (凝集性の評価)

前記の凝集性の評価方法において、下記を基準に破壊形態の目安とした。

A；界面活性剤層内の凝集破壊

粘着テープを剥離後に表面処理フィルムの処理面、粘着テープの粘着面ともに界面活性剤成分が確認された。

B；界面活性剤とベースフィルムとの界面における界面破壊

粘着テープを剥離後に粘着テープ側にのみ界面活性剤成分が確認された。

C；層間、層内における破壊なし

粘着テープを剥離後に表面処理フィルムの処理面側にのみ界面活性剤成分が確認された。

### 【0027】

(汚染防止性)

厚さが $25\mu\text{m}$ であり片面に離型処理の施されたポリエステル系フィルム（東洋紡績社製、E7002）の離型処理面に、アクリル系粘着剤（総研化学社製、SKダイン1473H）100重量部に対して硬化剤（日本ポリウレタン工業社製、コロネートL-45）1.0重量部を混合した粘着性溶液をバーコーターを用いて塗布し、100°Cで2分間乾燥した。該粘着塗工フィルムの粘着面を実施例、比較例に記載のフィルムのコーティング層に擦りつけ、付着した粘着剤のみをクレシア社製のJKワイパー150-Sにより拭き取った際の拭き取り性を評価した。

○；表面に付着した粘着剤が全て拭き取れ、拭き取りの痕が残らない

×；粘着剤が表面に残り、完全に拭き取れない

### 【0028】

(インキの密着性)

シャチハタ社製の速乾性丸型印11号（色調；赤）を実施例、比較例に記載のフィルムのコーティング層の上から捺印し、室温にて5分間放置した後にクレシア社製のJKワイパー150-Sを用いて拭き取った際のインキの脱落の程度を評価した。

○；インキを捺印した形そのままに残る

×；インキの一部、若しくは全部が脱落する

### 【0029】

以上の評価方法による評価結果を表1に示した。

### 【0030】

【表1】

	凝集性評価	汚染防止性	インキの密着性
実施例 1	A	○	○
実施例 2	A	○	○
実施例 3	A	○	○
実施例 4	A	○	○
比較例 1	C	○	×
比較例 2	B	○	×
比較例 3	C	○	×
比較例 4	A	×	○

【0031】

## 【発明の効果】

基材フィルムの最表面にフッ素系リン酸エステルのアンモニウム塩からなる界面活性剤からなる膜を形成した表面保護フィルムは、汚染防止性とインキの密着性に優れる。

【書類名】要約書

【要約】

【課題】本発明は、基材フィルム表面にフッ素系リン酸エステルのアンモニウム塩からなる界面活性剤の膜を有する表面保護フィルムである。

【解決手段】基材フィルムの最表面にフッ素系リン酸エステルのアンモニウム塩からなる界面活性剤からなる膜を形成した表面保護フィルムは、汚染防止性とインキの密着性に優れる。基材フィルムは熱可塑性樹脂を用いたものが好ましい。粘着剤としては、例えばアクリル系、ウレタン系、ゴム系、シリコーン系などを使用することができる。透明性の高いものが好ましく、粘着特性の容易さからアクリル系粘着剤が好ましい。

【選択図】なし

## 認定・付加情報

特許出願の番号 特願2002-366139  
受付番号 50201914550  
書類名 特許願  
担当官 第六担当上席 0095  
作成日 平成14年12月19日

## &lt;認定情報・付加情報&gt;

【提出日】 平成14年12月18日

次頁無

出証特2004-3010791

特願2002-366139

ページ： 1/E

出願人履歴情報

識別番号 [000003296]

1. 変更年月日 2000年12月 4日  
[変更理由] 住所変更  
住 所 東京都千代田区有楽町1丁目4番1号  
氏 名 電気化学工業株式会社

**This Page is Inserted by IFW Indexing and Scanning  
Operations and is not part of the Official Record**

## **BEST AVAILABLE IMAGES**

Defective images within this document are accurate representations of the original documents submitted by the applicant.

Defects in the images include but are not limited to the items checked:

- BLACK BORDERS**
- IMAGE CUT OFF AT TOP, BOTTOM OR SIDES**
- FADED TEXT OR DRAWING**
- BLURRED OR ILLEGIBLE TEXT OR DRAWING**
- SKEWED/SLANTED IMAGES**
- COLOR OR BLACK AND WHITE PHOTOGRAPHS**
- GRAY SCALE DOCUMENTS**
- LINES OR MARKS ON ORIGINAL DOCUMENT**
- REFERENCE(S) OR EXHIBIT(S) SUBMITTED ARE POOR QUALITY**
- OTHER:** \_\_\_\_\_

**IMAGES ARE BEST AVAILABLE COPY.**

**As rescanning these documents will not correct the image problems checked, please do not report these problems to the IFW Image Problem Mailbox.**